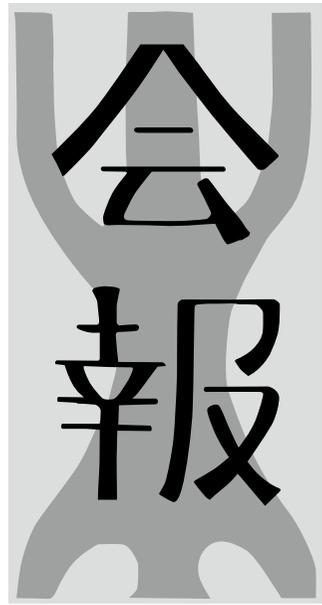


令和3年度 第65回

全国教員夏季研修会

期日 令和3年8月19日(木)

会場 各部会よりオンライン配信



日本私立小学校連合会

〒102-0073

東京都千代田区九段北4-2-25

私学会館別館6階

電話 03(3261)2934

令和三年度第六十五回日本私立小学校連合会全国教員夏季研修会が、八月十九日(木)すべての部会でオンライン形式で行われました。「私学ならではの小学校教育の展開」を研究主題とし、過去最高の千四百七十五名の参加者で、大変充実した研修が行われました。

昨年度は、西日本地区が担当され、綿密な計画の元、準備が進められていましたが、新型コロナウイルス感染症防止のため、やむなく中止となりました。今年度も本研修会を計画するにあたり、早い段階から準備委員会を立ち上げ議論を重ねてきましたが、コロナ終息の予測がつかめないとの判断で、最終的にオンライン形式で行うことを決定しました。日程的にも通常は三日間のところ、オンライン研修の特質から三日間は不可能と考え、一日での研修会を計画し

全国教員夏季研修会を終えて

運営委員長 横山 豊治



決定でした。しかし、各部会の実行委員の先生方を集めての会議を繰り返

ました。それでも、どのように研修計画を依頼し、どのようなオンライン研修ができるのか、大変不安の多い準備委員会での

子先生(青山学院)と五年生児童による研究授業。「作者に注目して、読み広げよう」というテーマの読書単元として、「カレライス」(光村図書)を教材にして行われた。授業後のパネルディスカッションは、福永俊文先生(福岡海星女子学院附属)・北井泰司先生(雲雀丘学園)・村上博之先生(関東学院)をパネラーとして、活発な協議がなされた。

十一時より提案発表を三分科会において行った。第一分科会は、小林紀江先生(帝塚山)による低学年「読むこと」実践。第二分科会は、田中史彦先生・渡部彩子先生(桐蔭学園)による低高学年の「シンキングツール」実践。第三分科会は、長田柊香先生・鈴木秀典先生・木村大望先生(成城学園)による低中高学年の「読むこと」実践。ブレイクアウトルーム機能を使って、参加者自身で希望するルームに入り、約六十〜七十名程の分科会で学び合った。

十三時から同様に、三分科会を実施した。第一分科会は、瀧川賢治先生(一燈園)による高学年「読むこと」。第二分科会は、佐藤浩太郎先生(桐光学園)による高学年「書くこと」。第三分科会は、堀口史哲先生(立

教女学院)による中学生「書くこと」。どれも、工夫が凝らされた研究的な実践であり、深い学びがあった。

十四時十五分、鶴田清司先生(都留文科大学教授)に講演をお願いした。演題は、「コンピテンシー・ベースの国語授業づくりー論理的思考力・表現力の育成を目指してー」。「根拠・理由・主張の三点セット」を基盤とした論理的思考を、ワークシヨップの要素や実践事例を交えて、体験的に学ばせていただいた。

二百四十名という参加人数で、動画配信のため前半はZoomウェビナー、後半はミーティングと切り替えを伴う大規模な研修会だったが、滞りなく運営でき、充実した内容であったことに心より感謝している。

社会科部会

「行動の一〇年」の社会科教育

東原 秀郎 (国立学園)

今年「行動の一〇年」の社会科教育をテーマに研修会を開催しま

した。

二〇二〇年より、二〇三〇年までの持続可能な開発目標(SDGs)の達成に向けた取り組みの加速化を求める「行動の一〇年」が始まりました。メディアで取り上げられる機会も増え、私たちのSDGsの認知度は上がってきました。中でも近年の自然災害の多発・激甚化からも、気候変動問題への関心が急速に高まっています。

そこで、社会科部会では、講師に国際環境研究所理事・主席研究員の竹内純子氏をお招きし、「二〇五〇年温室効果ガス排出実質ゼロをまじめに考えるー気候変動問題はなぜ解決が難しいのかー」をテーマに、気候変動問題の本質や解決の難しさ、多様な社会の課題をバランスを取りながら考えることの大切さについて講演していただきました。

二酸化炭素の排出量は、GDPとの強い相関

関係があり、経済成長を制約せずに減らすためにはイノベーションが必要であることや、低炭素化には電化の推進が有効であること、電力の安定供給のための電源構成のあり方について考えることが重要であること等について、くわしくお話していただきました。

2050年のカーボンニュートラルに向けて持つべき視点

- エネルギー政策は3E(Energy Security / Efficiency / Environment)のバランスを定めること。
- 気候変動問題は、エネルギー・経済問題。成長戦略につながるようにしたたかに考えることが必要。

「気候変動一神教」に陥らずに考えてみよう

エネルギー政策全体に対する視座

- > ビジョンに向かう途は多様であるべき
- > 時間軸を正しく。焦らない。
- > イノベーションを喚起し、日本の産業競争力強化を。

午後は一〇名程ののグループに分かれ、講演についての感想や各校のSDGsの取り組みについての情報交換が行われました。講演については、気候変動問題についての教材化の難しさ、多面的・多角的な見方やグローバルな視点の大切さ、子どもたちに行動変容を求めるのではなく自分の行動が世界につながっていると気づかせることの大切さなどが話し合われた。また、各校の取り組みの中から、『届けよう、服のチカラ』プロジェクト(福岡雙葉)、『プラステックごみを減らすために私たちにできることは』(国本)、『ジェンダー平等を実現しよう』『海の豊かさを守ろう』『陸の豊かさを守ろう』(沖繩アミックス)の実践報告が全体に向けて行われました。

オンライン開催ということで、例年はなかなか参加できない学校の先生方も多数参加していただき、自由なZoomの環境でも精一杯の話し合いや情報共有を行うことができました。ご参加いただいた皆様のご協力のおかげで、無事盛会裏に終えることができました。本当にありがとうございました。

来年度こそは、みんなで顔を合わ

せて、息遣いを感じながら一緒に学び合いたいと願っております。また、お会いしましょう。

算数部会

学びを深める算数授業づくり

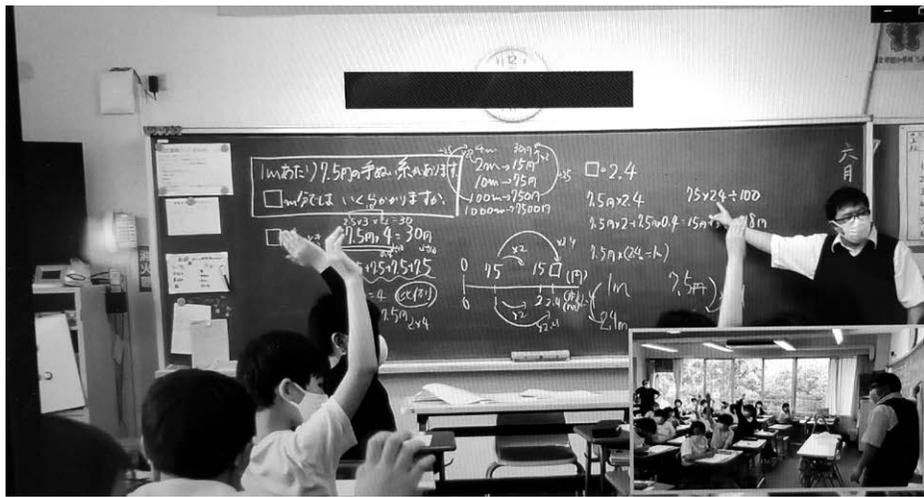
鈴木 純 (学習院)

子どもたちの学びを深めるためには、どのように授業をつくっていくのがよいのかという点について参加者と考えたいと思いました。そこで「学びを深める算数授業づくり」をテーマに参加される皆さんが受け身ではなく、主体的になれる研修会を開催いたしました。

最初に五年「小数・分数のかけ算」について浅田真一先生(国立学園)が行った授業のビデオを拝見して、協議会を行いました。かけ算の意味理解に重点を置き、かける数とかけられる数を小数で導入するという提案でした。かけられる数やかける数が小数になることで、子どもたちがその場面を身近にとらえるにはどうし

たらよいのかという話し合いなどが行われました。参加された先生方が積極的に意見を交わす有意義な協議会となりました。

次に、三つの研究発表が行われま



した。関口慎吾先生(学習院)からは『データの活用』領域で育成を目指す資質・能力「第六学年の実践を通して」という題目で、どのクラスが飛行機をよく飛ばしたかを話し合う楽しい内容でした。子どもたちは、データを分析して、代表値を活用しながら積極的に考えていたことが分かりました。竹村信一先生(関東学院)、山本真汐先生(関東学院)からは『算数×scratch』という題目で、変数の基礎概念を重視して将来を見据えた計算の自動化などの実践が紹介されました。関数的な考え方を深める斬新な提案でした。江間記世先生(同志社)からは、『子どものつばやきから深まる授業づくり』という題目で、相手を大事にした上で本音を語り合う学級や授業づくりの大切さを改めて感じる提案をいただきました。子どもと先生との温かい繋がりを感

じました。

午後は吉田映子先生(学習院大学非常勤講師)に「深い学びの実現ー学びを愉しむ『ハンズオン・マス』を体験しようー」という題目で講演をいただきました。講演だけではなく、算数の面白さをワークシヨップという形でご紹介してくださいました。折り紙を使ったタイルの活用やじゃんけんゲームなどを紹介していただき、算数の面白さを実感することができました。また、算数アートギャラリーについてご紹介いただきました。授業で学んだものを活用して、学校行事の展覧会などに、ブースを作り子どもたちの作品を展示されたそうです。六年生では、直線だけで曲線を描いていく活動でした。吉田先生は、中学校で放物線を学ぶときに「こんな曲線、小学校でかいたなあって思ってもらえればよいかな。」と思い語っていらつしやいました。

その後、吉田先生、大澤隆之先生(学習院)、時川郁夫先生(森村学園)、佐々木智子先生(帝塚山)を講師に迎えて内容の濃い懇談会を行いました。算数研究部には二〇五名の方が参加されました。

理科部会

おもしろい理科の授業をつくる

天井 比呂(雲雀丘学園)

理科部では「おもしろい理科の授業をつくる」を研究主題としてこれまで一貫して各先生方が日々研修・実践しておられます。

今回一日だけのオンライン開催ということになり、全国運営委員、東京地区委員で話し合いました。その結果、やはり私たちの根本は、各先生方の実践であり、それぞれの先生方が互いに学びあうことが大切だということになり、講演の時間を省いて、互いのコミュニケーションを大切にしたいという願いと、これまでの諸先輩方が継承されてこられたレポート一枚でも持ち寄って発表するという形を続けていきたい思いを合わせ、各先生方の発表の時間を最大限にとるように企画しました。

新型コロナウイルスの影響により、他の学校がどのように学習に取り組んでお

られるかをみなさんが関心を持っておられたように思います。参加者もオンラインということもあつてか、一〇六名というたくさんの方の参加がありました。

始まるまでは、「ズーム」でのトラブルが起きるのではないかと心配していましたが、大変スムーズに進行することができました。東京地区の先生方のチームワークのよさときめ細かい計画、素早い対応は大変助かりました。

今回の発表は十九本。例年よりも少なくなりました。これも試行錯誤されていて、発表まで至らないという現状があつたからではないかと推察されます。しかし、内容はとても濃いものでした。

子どもたちにとってより学習をおもしろくするか、理解するおもしろさを知ってもらうかができるかをみなさん探っておられました。

『「チリメンモンスター」

を使った生き物の仲間分け、「タンポポ綿毛のレジン封入作製方法」、「歌えないから、歌声奏でたい」のbardコール」のものづくりなどの実践紹介。「知識構成型ジグソー

本実践の参考

教材について

- ・ 鈴木 隆(1986)光合成産物の移動とその簡易検出法の開発 日本科学教育学会第10回年会p425-428
- ・ 高木正之 石井雅幸(2014)「活用の時間」で子どもの思考力を育む指導法の開発：小学校第6学年「植物の養分」での糖の合成の追究を通して 日本理科教育学会全国大会発表論文集

授業展開について



法による科学的概念への転換を目指した授業、「天体の学習の入口(宇宙への道)2020版」などの授業法の発表、ICTを学習に利用して行った実践発表では、みなさんメインとしてICTを利用するのはなく、一つの文房具的な存在として、利用されていきました。普段の授業の様子を実際に見せていただくなど、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

理科部のそういう発表だけではなく、吉金先生(宝仙学園)の発案により、最後にはすべての先生方が、無差別に各四〜五人のグループに分かれ、それぞれフリーで話をする場を設けました。よりコミュニケーションをとるように工夫していただきました。他の部会からも羨ましがられる企画であったかと思えます。本来なら会食をともにしながら交流を深める時がありますが、それが叶われない分、このような形で、交流が深められました。これも新しい研修の形であったかと思えます。

今回の横浜ではどのような形になるかはわかりませんが、これらの経験を活かし、ハイブリッド的な研修会もいいかもしれません。

音楽部会

子供たちの音楽力を保たせる 創意と工夫そしてICTの活用

室伏 唯史(学習院)

「音楽を通してのふれあいと学び」表現する楽しさを忘れないために」と研修主題を掲げ、午前は各地区よりコロナ禍での実践報告会とした。時間の制約もあり、各地区より一名、質疑応答を含め三十分程度で進化した。関東地区は聖マリア小学校の細沼弥恵先生。細沼先生は全学年を担当され、低学年は親しみやすい演出を、中学年は手作り楽器の製作を、高学年は鑑賞を中心にブレイクアウトルームを用いたグループ活動を行うなど、幅広い学年を持たれている経験を活かした内容豊かな発表だった。質疑では回線増によるWiFi環境の問題なども話題となった。

西日本地区は安田小学校の飯島聡志先生。ICT活用に関連づけた歌唱、器楽、鑑賞の実践を発表して

いただいた。歌唱は、屋上で風景を目にしながら、具体的な情景を心に描きながら歌わせる効果について。器楽は感染対策として、ポンプ式の鍵盤ハーモニカを製作し合奏に臨んだこと。鑑賞では、感想文に国語辞典を活用しながら音楽的な語彙を豊かにしてゆく指導例。更にICT機器の利用で、合奏指導が行き渡らない点を補う例など紹介された。実践の振り返りを詳しい表にまとめ、メリット・デメリットを提示された点が好印象だった。



東京地区は宝仙学園小学校の佐藤圓先生。鍵盤アプリ活用法やPDFミュージシャンで児童と楽譜づくりを共有できる例をあげていただいた。また教科指導外の活用方法も紹介され、特別活動における利用やプロジェクトセッションマッピングを試みるなど、早くからICT教育に力を入れてきた学校だけに、たいへん参考になる事例をうかがった。

今回の研修にあたり、日頃の創意工夫を快くご披露願えた三名の先生方に、敬意と感謝の意を申し上げたい。

午後は、打楽器奏者の村本寛太郎先生を迎えて、打楽器の基本と指導のアイデアを講演していただいた。よく使われる打楽器奏法の確認、撥の選び方、楽器のセッティングやメンテナンスについてなど、新学期から役立てられる内容だった。村本先生は、子供たちに与える知識や技術は「子供だから」という妥協をせず、古い慣習にとらわれることなく、教育現場に応じた柔軟な指導方法を推奨するお考えである。後半では収録動画

を含めた見事な演奏を披露していただいた。配信による画像や音質の劣化が懸念されたが、演奏の一つ一つの音から、村本先生が打楽器に傾ける情熱と指導への誇りが、心地よく伝わるのを感じられた。閉会後も時間を延長してZoomを開放し、先生方の質問に一つずつ丁寧に、そして的確な回答をしていただけました。

今回の研修会では、ICT活用の話題も盛んになったことに加え、リモートによる良さも認識できた。一日も早く対面形式が再開され、音楽を介して先生方との親交を確かめ合える日が訪れることを待ち望む。

図工部会

共創する学びの時間

関 隆弘（東洋英和女学院）

今回の研修会は、成城学園初等学校を会場にオンライン配信にて行われました。午前の部は、各地区から三名の先生方が実践発表をしてくだ

さいました。

東京地区からは、菅生学園初等学校の小松佑将先生が「ゆたか」と呼ばれている自然体験学習の時間と図工科との教科横断的な取り組みについて実践発表をしてくださいました。「ゆたか」の時間を通した自然や動植物との関わりや学びは図工科との相性が良く、【写生系】【調達系】【発展系】の三領域に分けて図工科の題材と関連付けられていました。中でも



【写生系】の実践では、小松先生の「見て描くこと」が図工科において大事なことのひとつであるという思いが反映されており、子どもたちが真摯に取り組んだ様子が作品からも伝わってきました。子どもたちにとって自然との触れ合いを通した図工科での学びは、非常に貴重な経験であり、菅生学園の地の利を活かした有意義な実践であると感じました。

関東地区からは、聖ヨゼフ学園小

学校の杉浦博子先生が「聖ヨゼフ学園小学校の図工の取り組み〜IB教育を通して〜」と題して実践発表してくださいました。国際バカロレア（IB）校の認定を日本の小学校として初めて受け、六つのテーマ【①私たちは誰なのか】【②私たちはどのような場所と時代にいるのか】【③私たちはどのように自分を表現するのか】【④世界はどのような仕組みになっているのか】【⑤私たちは自分たちをどう組織して

いるのか】【⑥この地球を共有するということ】に基づき、発達段階に応じた「探求型概念学習」を展開されていました。あらゆる事象に対しての「概念」を捉えることにより派生する子どもたちの思考や表現といったものが、非常に興味深い内容でした。

西日本地区からは、京都聖母学院小学校の入江俊平先生が「コロナ禍における図工の授業」と題して実践発表してくださいました。主に二〇二〇年度四月〜六月の取り組みについて、実際に配信された動画などを踏まえてお話ししてくださいました。入江先生が、「画面の向こうにいる子どもの顔を浮かべながら課題を考え、動画を作る。」を基本姿勢に制作された動画は、大変わかりやすく、子どもたちの学びに大いに役立ったことがうかがえました。また、国際コース在籍の子ども向けに英語版の動画制作をネイティブの先生と協力して行われたとのこともお話も大変興味深いものでした。質疑応答の時間を通して、参加の先生方のコロナ禍における取り組みについても共有することができました。

午後の部は、筑波大学附属小学校の北川智久先生を講師にお招きし

「少し変えると授業が変わる」導入、鑑賞、教具の工夫」と題して講演していただきました。子ども目線にたちながら全方位にアンテナを立て、日々研鑽を積み重ねられている姿勢に感銘を受けました。

今回の夏季研修会は例年より多くの先生方が参加して下さり、大変有意義な研修会となりました。

体育部会

二十一世紀に生きる 子どもたちのための体育

大久保 佑馬（精華）

今年度の体育部会は一日をとおしオンラインでの研修となりました。

第一部は「子どもの本当の力を引き出す体育授業とは」というテーマで自由学園初等部の森井宏之先生から実践発表がありました。日々の生活の中で、色々な気づきができるようにすることや、よいと思ったことはすぐに実行してみるなどが話

タブレット端末を活用した 学びの充実を目指して ～5年生リレーでの活用～



関東学院小学校 西 麻紀子

され、zoomのアウトブレイク機能を活用し、参加者で意見交換をしました。

第二部では「タブレット端末を活用した学びの充実を目指して～5年生リレーでの活用」というテーマで、関東学院小学校の西麻紀子先生から実践発表がありました。GIGAスクール構想が始まり、各学校でのPCやタブレット端末の児童への配布が始まりました。今回の体育

での実践方法は、今後の体育での活用の仕方を検討できました。

第三部は「奈良学園小学校の元気UPプロジェクト」の隙間時間でできる運動プログラム」というテーマで奈良学園小学校の古田浩大先生に実践発表をしていただきました。現代の子どもたちの運動量の低下に危惧し、奈良学園で行っている取り組みを用いて、改善策などを提案していただきました。

第四部は「体育の授業で育む力とは」というテーマでパネルディスカッションをおこないました。パネラーとして練馬区立富士見台小学校の逸見淳一先生、東京学芸大学附属小学校の長坂祐哉先生、筑波大学附属小学校の眞榮里耕太先生をお招きし実践から感じるお話をいただきました。その後、ブレイクアウト機能を用い、全国の先生方と意見交換をし、パネラーとしてお招きした先生方とも交流をもちました。

今回オンラインで初めての研修会でしたが、チャットやブレイクアウト

トを使い全国の先生方と意見交換ができ、充実した研修となりました。発表者の先生方に感謝いたします。

学校保健部会

全国各地から共に学んだ一日

鈴木 もとみ（仁川学院）

新型コロナウイルスの影響により、昨年度は残念ながら全国教員夏季研修会は中止となりましたが、今年度はオンラインで、第三回となる学校保健部会研修会を実施することができました。対面での研修が叶わず、残念ではありましたが、七五名という例年の約一・五倍の先生方にご参加いただきましたこと、大変嬉しく思っております。

午前の部では、二〇二〇年二月末の全国一斉休校以降、東京地区でコロナ禍において養護教諭の専門性を生かし、子どもたちの健全な育ちを守るべく、様々な取り組みをされていたことについて六名の先生が発表してくださいました。こんな時だけ



らこそ、子どもの体と心に起こっていることを可能な限り正確に把握したいという強い思いを持ち、日本体育大学体育学部教授の野井真吾先生をアドバイザーに迎え、昨年プロジェクトを発足されました。調査対象は東京私立初等学校協会に加盟している小学校のうちの協力の得られた一九校、男子一〇八四名、女子一六九三名の計三、七七七名で、大規

模なWEB調査や健康診断の結果など様々な方向からデータの分析が行われました。この調査を通じて得られた、子どもの体と心に現れた事実は養護教諭だけが把握するのではなく、他の教員にも発信・共有し、学校全体の課題として取り組む必要があると思われました。六名の養護教諭の発表後は、研究に協力してくださった日本体育大学の野井先生より「新型コロナウイルス感染症が子どものからだに与えた影響」というテーマでお話を伺うことができました。また、「子どもたちのために学校・家庭・地域は手を組まなければならない。今回の東京地区の調査の結果は、人を動かす、社会をつなげるためのはじめの一步になる可能性を秘めている。」というお言葉をいただきました。

午後の部では、東京慈恵会医科大学解剖学講座の教授でNPO法人CUDO副理事長の

岡部正隆先生より、「色弱の子どもたちに学校でできるサポートについて」お話しいただきました。医師であり、ご自身が色覚異常でもある岡部先生のお話は実体験に即し、とても分かりやすく学校教育にもいかにヒントがたくさんありました。実際に見やすい色・見にくい色の組み合わせや、どのような工夫をすれば皆が見やすくなるかなど、具体的な方法だけでなく、色弱者は時に情報収集において社会的弱者になってしまふということも学びました。また、色弱の子どもたちにとっては、家庭内でも同じ見え方をする人が居ないことがほとんどで、相談する相手がない場合などもあり、教員の理解を深める必要性も含め、学校でのサポートの重要性を改めて学びました。

普段は遠方の研修会には参加しづらい養護教諭ですが、オンラインだからこそ多く集まり、全国から共に学ぶことができました。この経験を活かし、今回東京地区でされた様な研究が、今後全国の私立小学校の養護教諭間でできる日が来るかもしれないと、新たな可能性を感じながら、研修会を終えました。

学級経営部会

今自分たちにできる学級経営

大橋 駿一（桐朋学園）

午前中は、文教大学教育学部学校教育課程・教育学研究科(兼任)手嶋将博先生をお迎えし、「子供の主体性を高め生きる力を育む学級経営と」をテーマに講演をうかがいました。

「教員」は、教育に関わる者として、教育観、子ども観を確立し、自身も学び続ける姿勢を示し、伝えることが重要です。現代は、一生を通して「学び」続けることが必要であり、また、それを可能とする「生涯学習社会」です。変化の激しい現代社会では、学校で学んだ知識・技術だけでは不十分になりがちです。それらを基盤にして、社会に出て、常に新しい知識や技術を「自ら学び続ける」ことが求められます。自ら学び続ける必要性は、社会に出てからも「自ら主体的に学び続ける能力」を身に着けることが大切になります。教師

アイズブレイク

今の気持ちを表してみましょう (+理由)
表情イラスト 漢字一字



年	漢字	読み方・説明
2020年	密	(ミツ・ビツ/ひそかに、ごまかい) 世界中が新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けた一年。「3「密」という言葉が提唱され、生活・行動様式が「密」にならないよう国民が意識し続けた。海外でも3C (Crowded places, Close-contact settings, Confined and enclosed spaces) としてメッセージを発信されるまで。また、政治判断が「密」室で行われたことや芸能界での「密」会報などでも使われた年。
2016年	金	(キン・コン/かね・かな・ごがね) リオ五輪に沸き、東京五輪に希望を託した「金」(キン)と、政治と「金」(カネ) 問題に揺れた年。スポーツ界に新たな金字様、マイナス金利初導入、シンガーソングライターの金色衣装などにも注目が集まった。



* 日本漢字能力検定協会「今年の漢字」一頁
https://www.kanken.or.jp/project/edification/years_kanji/history.html

メタ認知するための多様なリフレクションです！

現在も、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、学校生活の中でも多くの制限が強いられています。そのような中でも、目の前にいる児童のためにできる最大限な事は何かを常に考えていきたいと強く思える講演となりました。

午後は、以下の九つをトークテーマとし、さまざまな地域、世代の先生が混ざるような小グループでフリートークの時間

自身にも、そのような資質、能力が求められます。学び続ける姿勢を子どもたちに見せること、ただ単に教えるインストラクターではなく、ファシリテーター(先導者)の役割が求められています。教員は知識や技術を教えるだけの存在ではなく、主体的に学ぶことができる能力、自ら考え、判断し、意思決定できる能力

を身に付けさせることも重要なことです。

子どもは「しなさい。」と言われてたことより、自分でおもしろいと思っただけの活動をやらせたい。健康面でも、人から言われるだけでなく、子ども自身が主体的に考え、対応できるようにしなければなりません。

- ① 午前中の講演を聞いて
 - ② 最近の悩み/嬉しかったこと
 - ③ 学級活動における私の鉄板ネタ
 - ④ 私が学級経営で大切にしていること
 - ⑤ コロナ禍で変わったこと・変わらなかったこと
 - ⑥ これからこんな実践してみたい
 - ⑦ 先生方、〇〇について教えて
 - ⑧ 役に立った研修・実践/おすすめの本
 - ⑨ 学級経営に関するフリートークリフレクションの際、フリートークの前後で、先生方の心情の変化が「漢字一字」や「顔文字」などで知ることができ、またこの方法もすぐに児童と実践できるものでした。
- オンライン形式ではありましたが、たいへん有意義な夏季研修会になったと感じています。今回の研修を終えて、先生方のお気持ちとしても、「学級担任としての悩みが共有できた」「教員としての資質が向上できた」「改めて『学級経営』の大切さをたしかめることができた」などと思えることができました。心より願っております。ご協力ありがとうございました。

メディア教育部会

これからの教育のカタチを考える

田中 栄太郎

(日本女子大学附属豊明)

昨年度の本会報で、コロナ禍においても子どもたちの学びを止めず進め続けてきた経験は、私学の財産になる。そしてこれからの学習の鍵はICTである旨を述べました。あれから一年経った今、それはごく当たり前のことになったと感じます。私たち私立小学校とその教員は、各校それぞれの対策に対応し、確実にレベルアップをしております。本研修では、それを裏付ける報告や、実践発表がありました。

午前中は地区報告から始まりました。各地区でオンライン化が進み、ICTによって授業を変えていく必要がある。そのためにもお互いの情報交換が重要と考えられました。

続いて三つの実践報告が行われ、初めに聖学院小学校の岡田俊介先生

から東京地区の各校のアンケートに基づき、一人一台環境の現状報告がありました。導入端末の86%はiPadであり、半数以上の学校でロイロノート・スクールとGoogle Classroomが使用されていること、端末代はほぼ家庭負担であることなどが、数値で示されました。また、ドリルアプリとデジタル教科書の導入や、情報教育のカリキュラムの必要性など今後の課題と展望が語られました。

次に、森村学園初等部の黒澤友美先生から体育の50m走の授業の実践報告がありました。iPadの活用により、子どもが自分の動きを視覚化し、手本の動画との比較から課題を見つけるなど、児童主体の学びが展開されました。子どもたちに授業で身につけてほしい力は何かを明確にすることで、子どもたちの目標設定が促され、より良い学びに繋がること示されました。

最後のアサンプション国際小学校の森岡俊勝先生の新聞作りの授業報告では、ただiPadで作成するだけでは意味がないことに気づかせて、新聞を見てもらう目的を確認することで、子どもの意識が変化し、

より深い学習が展開される実践がなされました。また、プログラミングの授業についても取り上げ、卵を割る手順を考えるワークの体験もありました。プログラムで正しくゴールに導くためには、見直しと修正が必要で、これを転じて子ども自身の生活にも応用する事例が紹介されました。

午後は国際大学GLOCOM准教授・主幹研究員の豊福晋平先生の講演「二〇三〇年代の教育をさきどりするー一人一台環境で実現する学習者中心の学びとは何かー」でした。私立小学校が目指す先は何か。世界の教育の中で日本に欠けている点、一人一台の端末を活用する意義、情報社会での教育のあり方、デジタル・シティズンシップなどのこれから必要なスキル。考え方から具体的な活用方法まで幅広く網羅した内容でした。我々教員が、ICTで何をすべきかということ、今後十年後二十年後の教育のあり方を考える、極めて重要な内容でした。

本研修で学んだ情報は有意義で、量も非常に多いものでした。私たち教員が、そこから今の子どもに必要なものを選び、実践していくことで、子どもたちの未来が切り開かれます。新しい教育のカタチは確実な一歩を積み重ねていくことが重要なのです。

学校図書館部会

夏季研修会を終えて

大澤 育子（武蔵野東）

第一部では、研究主題「遠隔授業などICTを使った読書教育・図書館運営の検討」に従って、各地区から4人の先生方に発表していただきました。東京地区からは、村木郁子先生（学習院初等科）と藤本静香先生（立教小学校）からお話がありました。村木先生は、一人一台タブレット端末を用意し、ロイロノートを使用し、おすすめの本紹介・ポップ作り等を行ったそうです。藤本先生は、休校時のオンライン授業では、著作権の問題が生じるので、オリジナルの作品を作りました。それをGoogle Classroomを使って、児童に紹介しました。オリジナル作品は、とても好評だったそうです。関東地区からは、徐奈美先生（関東学院小学校）が発表しました。まなびポケットとMetaMoji Classroomを使用して取り組みを行いました。まなびポケッ



田中 栄太郎◎日本女子大学附属風巻小学校

学校図書館部会 第53回
遠隔授業などICTを使った
読書教育・
図書館運営の検討

12:00 開会 司会/岩井(慶應) 記録/大澤(武蔵野東)
12:05 開会式動画視聴(画面共有)
12:20 担当理事(岡崎一実:関東学院)からの挨拶と運営委員の紹介

>第1部 研究主題について各地区からの実践報告と情報交換会
司会/帆玉(関西創価) 記録/宇治田(横浜三育)

12:30~13:10 東京地区(学習院 村木・立教 藤本) 発表30分・質疑応答10分
13:10~13:40 関東地区(関東学院 徐) 発表20分・質疑応答10分
13:40~14:10 西日本地区(甲南 田代) 発表20分・質疑応答10分
14:10~14:45 情報交換会(ブレイクアウトルーム)。回答部会のZoomが終了。
14:45~15:00 休憩。フィンツアーのZoomに入室。

>第2部 フィンランドオンラインツアー ムーミンとトーベ・ヤンソンを巡って 司会/大澤 記録/堀野(洗足学園)

15:00~15:40 レクチャー 森下圭子氏(ヘルシンキ現地時刻9時)
15:40~16:00 質疑応答。フィンツアーのZoomが終了。再度、第1部の回答部会のZoomに入り直す。
16:00~16:15 第1部の各グループで出たトピックを全体で共有する。
>その他 司会/岩井
16:15~16:25 アンケート(第2部の感想・次年度研修会の要望)実施についてと今後の情報交換について。
16:25 担当理事からの挨拶

トの中に、ポプラーディアネットがあり、それを利用してクイズを毎日配信しました。また、出版社の許可を得て、読み聞かせ動画も配信したそうです。最後に、西日本地区の田代弘子先生(甲南小学校)から、SARTRASに無料使用の申請を行った話をお聞き

しました。電子書籍の読み放題サービスも利用されたそうです。発表してください先生方、貴重な情報がありとうございました。発表の後、五つのグループに分かれて、コロナ禍でのICTを使用した実践で上手くいった点・いかなかった点・今後の課題について、意見を交わしました。

第二部は、「フィンランドオンラインツアー」ムーミンとトーベ・ヤンソンを巡って」という演題で、フィンランド在住のムーミン研究者・翻訳家の森下圭子さんにお話を伺いました。森下さんから、トーベ・ヤンソンの幼少期の原風景で、毎夏家族で過ごしたペツリング・ムーミンの生まれた森・晩年に過ごしたクルーヴハルについて映像を観ながら解説していただきました。モランにそっくりな岩やムーミン物語に登場する「スニフの洞窟」やトーベが自ら石を積んで作った小屋などを見るのが出来ました。また、フィンランドの少女がスウェーデン語で『ムーミン』を

朗読するのを聞くことが出来ました。最も心に残ったエピソードは、ソーシャルディスタンスを取ってほしい時、フィンランドでは「モラン一つ分空けてください」と呼びかけるといふものです。いかにムーミンが親しまれているかが分かるのと同時に、一人ひとりが適切な距離を想像して判断するべきというフィンランド人の考え方が表われていると思いました。その後は、先生方からの質問に森下さんが答える時間を取りました。日本に居ながらにして、現地と繋ぐことでフィンランドを感じられる時間が持てました。今回が初のオンライン研修会でしたが、一部・二部共に有意義な会となりました。

外国語部会

二一世紀の国際社会を生き抜く世界人の育成

荒井 繁里(雙葉)

初めてのオンライン開催となった今回の夏季研修会には、一〇〇名を

超える先生方が外国語部会に参加してくださいました。

午前の講演会では、先進的な取り組みを続けておられる新渡戸文化学園小中学校・高等学校の統括校長補佐の山本崇雄先生に、子どもたちの自律的な学びをどのように作っていくかということを中心にお話し頂いた。「教えない授業」の実践により、児童・生徒は、自律した学習ができる力を身につけられる。このことからコロナ禍で変化していく教育現場の渦中にいる私たち教員は、これからの社会の中で生きていく子どもたちにとっていった力を身につけさせたらいいかを考えるきっかけを頂いたように感じた。次に明治学園小学校@James Burdis先生から、『Second language education in the twenty-first century』の研究発表があった。児童のモチベーションをいかに上げ、コミュニケーション能力を高めていくかは、外国語教育に携わる教員としては、常に問い続けていかねばならない課題である。そのヒントを今回の研究発表で得られたように感じる。単に机上の英語教育にとどめることなく、実践的な英語を身につける

大切さを感じた。午前の部の最後は、甲南小学校のMatthew Batusiu先生より、コロナ禍の対応及び、英語科の取り組みについてお話し頂いた。この二年間どの学校でもコロナ禍の対応に悩み、模索し続けて来た。その中での、甲南小学校の今回の発表は、今後の感染症対策に大いに役立つものとなった。

午後の講演は、MPower Partners「ゼネラルパートナー」の村上由美子氏による「国際社会から見た日本の人材育成」で始まった。村上氏は日本人の学力は世界でもトップクラスにあること、そして日本の学校教育は、子供たちの高い読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーを育てていると述べられた。一方で、困難な状況で解決策を見出す力の弱さ、自己効力感が低く失敗を過度に恐れてしまう姿勢、生活満足度の低さなど、日本の子供たちが抱える課題も指摘された。私たち日本人は日本人の持つ「協力する力」と「高い学力」に新たに

「他とつながる力」をつけることが大切であると話された。次に明星学園小学校のBlain Cameron先生によるアイスブレイクが行われた。身体全体を使った楽しいアクティビティと好評だった。次に郡山ザベリオ学園小学校のAndrew Lankhear先



生は、ご自身で書かれた英語テキスト「English Language Booster」を紹介してくださいました。最後は横須賀学院小学校の阿部志乃先生から「Language Awareness」についての研究発表があった。小学校で英語を学ぶということは外国語の学び方を学ぶチャンスでもあると話が印象的だった。

その後のブレイクアウトセッションでは、互いの近況報告をし、親睦を深めることができた。オンライン開催であったが、参加者同士交流する時間を持つことができ、充実した研修となった。

家庭科部会

新しい暮らし方の中での
日本文化の継承

明石 ゆかり(武蔵野東)

「大切にすゝかたち、和食文化を通じた、さまざまな敬意と環境負荷を考える」

講師 海老原 誠治氏

多岐に渡り講演をしていただいたので、幾つか重要なポイントを絞ってまとめていくことにする。

○水や肥料の資源から考える食糧問題(ライフサイクルアセスメント)
水、肥料、エネルギーなど、様々なものが必要であることを環境を視点として伝えることが大切である。

○3Rと2Rを考える

日本の食料自給率は38%でほぼ輸入に頼っているのに、毎年13億トンの食糧が無駄に捨てられる。日本でも食品ロスが問題となっている。生活の中でCO₂の排出量の多くは「食べる」部分で12%を占めている。食べ物全体の5%が肉であり環境負荷が大きい食べ物である。水や肥料を多く使うことが肉の環境負荷が大きくなる原因となる。日本人には影響はないが影響が出るのは貧しい人々。

○多様に複雑化するあらゆる貧困

昔は豊かな国、貧しい国と、国で分かれていたが、現在は国の中の貧富の差が激しくなってきた。日本でも貧富の差が広がり、特に母子家庭に集中しているデータがある。そのため、日本でも子ども食堂が普

及してきた。

○多様性と「自然の敬意」で成り立つ「和食」

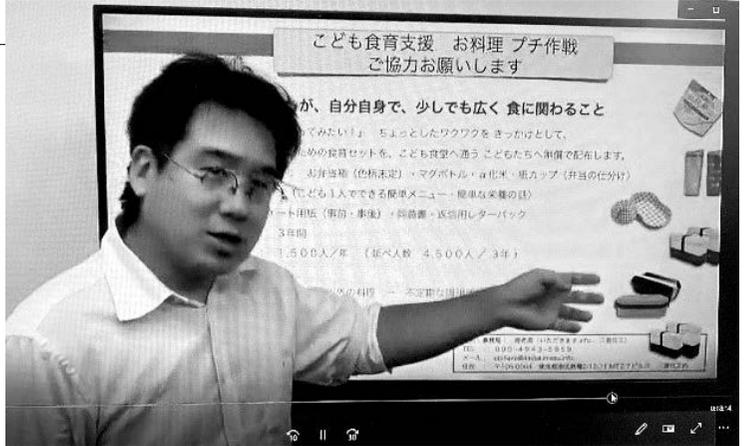
昔は、命、資源、害虫、道具すべての物を敬い、供養していた。

「和食」は、和食を食べて維持する行為が大切。歴史的、地域によって変わってくる多様なものであり、常に変わりながら再構築されるものである。自然の尊重という精神に基づいたものである。

○伝統文化の伝達と個人の思想の自由

文化はいろいろな国の良い所を、お互いに敬って影響し合い取り入れるために学ぶものである。お互いに尊重するために文化を学んでいる。昔の人は海外の文化を、良いものは良いと排除せずに取り入れた。

日本は自然が豊かである。しかし、時々水不足が起こる。水がないと大変であることを知っているからこそ、大切にし、敬っている。天気や雨を気にしながら過ごしているため、少しの変化も敏感に感じ、表現することができた。



「食器を分ける」ということは、一つ一つの味を大切にすること。日本では自分の箸や器を自分で選んで食べることを楽しむことができる。器や盛り付けを工夫して相手の気持ちを考えてることを「しつらい」と言い、おいしい食べ物をよりおいしく食べられるように工夫することも「しつらい」と言う。おいしい食べ物Ⅱ「しつらい」、おいしく感じる工夫Ⅱ「しつ

らい」、合わせて食を通じたおもてなし。食べ物を通じて相手の人を大切にするやり方である。

○日本の文化を知ることや、海外の文化を知ること、自分なりのやり方で自分が大切にしたいことを守っていくことが大切である。

生活・総合部会

授業と授業を繋げていくもの

大谷 一途（慶應義塾）

今回は、昨年度発表予定だった先生方も含め、各地区からの実践発表から学ぶことにした。ずっと画面を視聴して研修する先生方の疲労を考慮、一人四十分の発表とした。

まず、西日本地区から神戸海星女子学院小学校の山内泉先生に、ダンゴムシから学ぶ実践を発表して頂いた。ダンゴムシを「子どもが最も抵抗なく触れる虫」として、教材化した。先生は、動物行動学を学んでおられ、ダンゴムシについても深い知識を持たれ、それに基づいて活動を

提案して、それを嬉々として行う子どもの様子を拝見した。ダンゴムシの綱渡り・好きな場所・好きな食べ物・ダンゴムシレース・迷路を作り、どこを出口とするか等、様々な実践的な活動を用意し、結果の予想や、結果の考察を子どもたちと考えた。遊びながら知的な学びへと誘う授業であった。

次は、九州地区から長崎南山小学校の江上沙和子先生に、アサガオ栽培から、草木染めに至った実践をご報告頂いた。二年生からもらった数種の種を、一年生が育てながら、学んでいく中で、色水遊び、それを園児に教える活動へと発展した。花が終わり、種に注目したところで、季節の変化に興味がいく。それをきっかけに紅葉した葉に注目させ、秋を見つける単元に移る。その中で、新たな色遊びを探るようになり、先生が草木染めを紹介し、草木染めに活動が移る。話し合いで、数種の植物を染めることになり、それぞれ工夫して、布を染めた。そして、友達のを鑑賞する中で、さらに工夫を加えた染め方を探求していく。要所要所の投げかけで、子どもの活動が繋がっていく見事な実践だった。



三番目に、私、東京地区の慶應義塾幼稚舎の大谷が発表した。新型コロナ禍での総合で、逆に実践に寄与することがあった。ロイロノートのカードを飛ばし合う中で、足りない時間をカバーし、活発に調べ、グループと共有し、発表を盛んにできたこと、学校での調理実習の禁止をうけ、家で作ることで、各自が全工程を自

はかせになりたいたいと思ひ、凶鑑作りを目指す。細かい観察で、好む場所・足の数の変化・出産・雌雄の違い・アルビノの発見等々知識が増えていく。動き方も、それぞれに工夫して実験するが、凶鑑に載せるために、全員で実験し直す等、全て子どもが活動を繋げていく。また、全体に授業を進めながら、気になる児童の成

分でやれたこと、うまくいくまで、何度かやり直しができたこと、学校にない器具が使え、調理の幅が広がったことを挙げた。制限の中でも諦めず、工夫した賜物だった。

最後に、横浜雙葉小学校の壁谷明子先生が、前任校でのダングムシの実践を報告した。壁谷先生は、一年からの子どもの興味をそのまま授業にトレースする形で、実践を進めた。捕まえたら、住処作り、観察する中で、

長を促しもした。正に個を育てながら、全体の授業も子どもたちが作った素晴らしい実践だった。最後に発表者毎のブレイクルームに分かれ、質疑応答や、情報交換が有意義に行われ、閉会となった。

学校劇部会

子どもたちに心のつながりを
〜今できる・今こそしたい
劇活動〜

保坂 弘之(成城学園)

学校劇部会は、今回で十回目の研修会。今までは、準部会でしたが、今回より正式な部会となりました。

さて今年の研修会は四八名の参加者がありました。

開会式の視聴、担当理事の北山ひと美先生のご挨拶が終わった後、最初は各地区からの報告でした。

最初は坂田道則先生(相模女子大)より昨年一二月に関東地区で行った研修会の様子の紹介がありました。次に東京地区の中村俊英先生(立

教)より、登校できない新入生向けに一昨年度の学校劇部会の研修会で作成した人形を使って、学年の先生方と協力して作成した配信ビデオについての報告がありました。

西日本地区からは、木村実沙子先生(大阪信愛学院)より、演劇クラブの活動とクラスでの活動の報告がありました。

いずれもコロナ禍ではあるけれど各地区での取り組みに勇気づけられました。

続いて「音読ランドへようこそ」挟間理沙先生(京都文教短大付属)による一年生での実践発表。音読をテーマにして、「国語」でやった俳句作り、「生活科」で見つけた落ち葉の小道具、「図工」で作った背景の大道具など、一教科に留まらない総合的な発表の報告がありました。児童会活動も含め学校全体で年二回ある発表会に取り組んでいる様子。日頃から「朝根っこタイム」という音読タイムに取り組んでいること。そして、発表に向けて学級での取り組み。舞台発表での子どもたちの生き生きとした姿。とてもすばらしい実践発表でした。

午後は、絹川友梨さん(俳優・インプロワークス代表)によるワーク



「シヨップ」オンラインでファッションのセッションを学ぶ「インプロ(即興)の技法を使ってみて下さい。」先に感想を述べれば、「あつという間の三時間でいい」「アクティブに参加できて楽しかったです。」「目からうろこが滝のように剥がれ落ちた。」「室内でも汗が出るほど、熱く

なっていました。」「等々、参加者の皆さんからのアンケートでも絶賛の嵐でした。Zoomの機能を使って、参加者同士が繋がり合い、学校でも活かすことのできる活動をたくさん体験しました。」「今いること、今やっていることに集中する」「ずれや失敗を楽しむ」「自分がいかに面白さを見つけるか」「答えがないところに答えをつくっていく」等々いくつもの印象的な言葉をいただきました。楽しみなながらも、普段の自分を振り返る良い機会になりました。

研修会前の会報で「ワークショップが終わった時には、参加者同士のつながりも実感できると思います」と書きましたが、その通りになったと思います。今回はオンラインでの研修でしたが、実り多き研修ができました。しかし、来年は是非、対面でお会いしたいと思います。

令和3年度 第45回 全国教頭研修会

期日 令和3年8月20日(金)
会場 オンライン研修

これからの教育に必要なこと

武蔵野東小学校 市川 智

令和二年度の第四四回全国教頭研修会はコロナ禍のため中止となりましたが、一年経った今年度の第四五回も全国の皆さまが東京に集まることはできませんでした。全国教員夏季研修会に合わせて、

オンライン研修会として午前中のみの企画を考えました。全国から八十一名(北海道・東北三名、関東二十五名、西日本十三名、九州三名、東京三十七名)の申し込みがあり、当日は七十五名の先生が参加されました。一年以上前からオンラインでの授業や保護者会を実施してきたことや、参加者の皆さまのご協力もあり、オンラインによる研修会はスムーズに実施することができました。九時三十分からの開会式では、各地区運営委員からの挨拶がありました。昨年度からのことも含めて、近況を伝えてもらいました。第一部は「これからの教育に必要なこと」という演題で平井聡一郎氏にご講演をお願いしました。平井氏は、経済産業省産業構造審



議会臨時委員・文部科学省ICT活用教育アドバイザー・総務省プロگرامミング教育事業推進会議委員・茨城大学非常勤講師などをされています。

テクノロジを用いたICT教育の可能性を参加者に体験させるためにテキストマイニングで瞬時に参加者の考えを見える化し、マトリクスを変えなければいけないことを示唆されました。そして、

「勇気と度胸が大切」と励まされました。

第二部は情報交換をしました。はじめに「ICT教育」次に「校内コロナ対策」と二つのテーマについて六名ほどのグループで話しました。二十分間程度の短い時間ではありましたが、各地区の状況を知るよい機会となりました。ここでの情報は九月からの学校運営に活かせるものでした。

て、学校DX(デジタルトランスフォーメーション)の必要性について、学習指導要領の改訂についてが語られました。学校はどのように学び、未来を明るく変えればよいか、ポストGIGAのポイントなども説明してくださいました。他にも多くの示唆がありました。

これから学びを変える、学校を変える、未来を変える、全体をリードし新しい学びにチャレンジして新しい学校をつくるのは管理職の皆さんであるとの話もあり、「未来を変えられる子どもを育てて欲しい。」「つべこべ言わずにやってみる。」「

閉会式では次回の開催地である関東地区代表、桐光学園小学校の馬場先生よりご挨拶をいただきました。そして、来年度こそ、お会いしたいという願いを込めて、皆さんマイクのミュートを外して声を出し、手を振って退室していただきます。

事後アンケートには、全国の先生方が集えたことの喜びや、時間設定の短さが残念だったとの声がありました。ご協力に感謝いたします。



訂正とお詫び

令和三年八月二十日発行の会報三五七号に誤りがありましたので、訂正してお詫び申し上げます。

◎十九ページの令和三年度理事長・校長等の異動No.131 賢明学院小学校の新任校長名

誤 坂東 正
正 板東 正



2020年代の教育宣言

2020年代、私たちは多くの節目を迎えます。学制施行から150年。「大正新教育・八大教育主張講演会」から100年。私立学校振興助成法公布から50年。殊に1941年、国民学校令に合わせた私立小学校廃止の動きから「初等学校」の灯を守り、日本私立小学校連合会が産声をあげて80年となります。これらの節目において常に私立小学校は存在感を示してきました。この歴史に誇りをいただき「一年樹穀、十年樹木、百年樹人」と言った古人にならい、私たちは新たな百年に向けて人を育てる営みを続けます。

2020年代は、人工知能(AI)の想像もつかない発達等によって劇的な社会変革を迎えると言われます。しかし、この潮流の中だからこそ、より人間らしく生きることを疎かにしない心と学力を育てる教育が私立小学校に求められています。

そのために、私たちは、

- 一、それぞれの建学の精神に則り多様な特長をもつ学校群として、伝統を重んじつつ、自由と人権、児童一人一人の個性を尊びます。
- 一、児童愛をかたときも離さず、児童の内なる可能性を引き出す方法を実践・探求します。
- 一、未来を切り拓く資質と心豊かな人間性を育成します。
- 一、真の世界平和と持続可能な環境の維持をめざして、広い視野をもって考え、共感する心や他者尊重の心を育みます。

私たちは、新たな時代に向けて私学人としての自覚を持ち、お互いに磨き合い、我が国初等教育の新たな創造をめざすことをここに宣言します。

2020(令和2)年6月12日

日本私立小学校連合会